

宮内伊予柑高接ぎ更新樹の枝梢の生育に及ぼす摘心、芽かきの影響

今村俊清・中村早苗(長崎県果樹試験場)

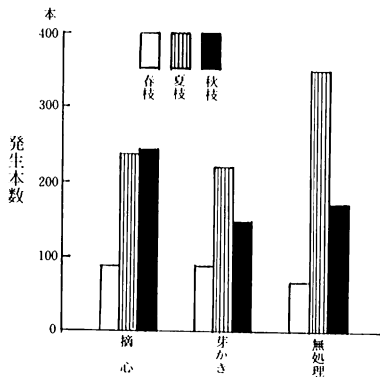
IMAMURA, T. and S. NAKAMURA : Effects of Pinching and Disbudding on the Growth of "Miyauchi Iyo" Tangor Scions Top-Warked on Satsuma Mandarin Tree

温州ミカンの価格の低迷に伴い、各地で商品性の高い中晩生カンキツへの高接ぎ更新が進められている。高接ぎ更新樹では早期に収益を高めるために、早急に樹冠の復元拡大をはかる必要がある。このような見地から、現在、高接ぎ更新において必須のように考えられている摘心、ならびに芽かきを無処理と比較検討した。

1. 試験方法

長崎県果樹試験場内の19年生林系温州を中間台木として、1981年4月に高接ぎ更新を行った宮内伊予柑9樹を用い、6月中旬以降に次のような枝梢処理を行った。

- 1) 摘心 春枝を葉数8～10枝のところで摘心した。
- 2) 芽かき 1本の春枝から数本発生した夏枝を1本に制限した。
- 3) 無処理



第1図 枝梢処理と枝の発生

なお、枝の生育量調査は、1982年3月2日～18日に行った。

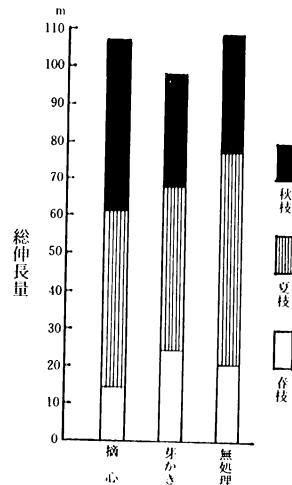
2. 試験結果

1) 摘心区は秋枝の発生が多く、総伸長量は大きかったが、枝の全長が他の2処理に劣った。

2) 芽かき区は秋枝の発生が少なく、1樹当たりの総伸長量が劣り、全葉数も少なかったが、1本の枝の全長は大きかった。

3) 無処理区は夏枝の発生が多く、1樹当たりの総伸長量が大きく、また、1穂から発生した枝の最長枝の全長が長く、全葉数も多く、樹冠の回復が良好であった。

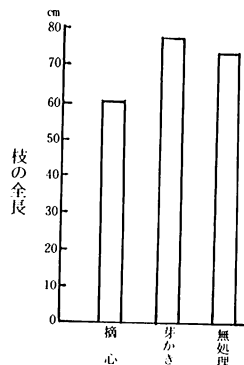
以上のように、摘心処理、芽かき処理と無処理では、無処理の方が枝が長く伸び、あるいは着葉数も多いなど樹冠の回復がよかった。



第2図 枝梢処理と枝の総伸長量

第1表 着葉数

処理	春		夏		秋		合計 全葉数
	総葉数	平均葉数	総葉数	平均葉数	総葉数	平均葉数	
摘心	650	7	2561	11	2618	11	5828
芽かき	1221	14	2537	12	1579	11	5337
無処理	991	15	3561	10	1684	10	6236



第3図 枝梢処理と枝の全長
注)枝の全長(接ぎ穂から発生した枝のうち最も長いものの基部から先端までの長さ)